

Title	陳士元『夢占逸旨』内篇訳注(七・了)
Author(s)	清水, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 197-230
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58719
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 陳士元『夢占逸旨』内篇訳注(七·了)

清水洋子

堂刊本)所収本(以下、「芸本」と称す)を校本とす 民国五十七年台北芸文印書館景嘉慶中南匯呉氏聴奏

る (注1)。

・本文には【原文】【書き下し文】【現代語訳】【語注】 ・底本と校本との異同については、【原文】中の傍線部 を付し、注には【原文】【書き下し文】を付す。

と丸数字とで示し、【校異】で詳細(校訂を要する場 合など)を挙げる。

旧字体や異体字は、必要な場合を除き新字体に改め

・文意の補足は〔〕で、注記は( )で示した。 注の引用文に出拠が明示されていない場合は、可能な 限り補い、【書き下し文】の中で示した。

・注の引用文には、翻案あるいは誤引と思われるものも

凡例

訳注の対象とする。

中国哲学学会、二〇一二年)に続き、本編では感変篇を

る。古法篇を対象とした「陳士元『夢占逸旨』内篇訳注 (六)」(『中国研究集刊』剣号(第五十五号)、大阪大学

陳士元『夢占逸旨』内篇訳注の第七稿であ

本編は、

はじめに

下、「帰本」と称す)を使用し、呉省蘭輯 三年応城呉毓梅校刊同治十三年修補本) 『夢占逸旨』の底本は、陳士元撰 『帰雲別集』(道光十 『芸海珠塵 所収本(以

ある。参考として、出拠の原文を本編末の注に付す。

# 感変篇第十

本文 感変九端、疇識其由然哉

列子、不識感変之所由起者、事至則惑其所由然、 識感変之所起者、事至則知其所由然、知其所由 則一体之盈虚消息、 皆通於天地、 応於物類、

①芸本は「所起者」とする。

③帰本は「之応因物類」とするが、ここでは芸本と『列 ②ここでは芸本、『列子』に従い「其」を補った。

子』に従い、「応於物類」に改めた。

# 【書き下し文】

本文 感変九端、疇か其の由りて然るを識るや。 う。感変の起こる所を識る者は、事至れば則ち其 『列子』〔周穆王〕、感変の由りて起こる所を識ら ざる者は、事至れば則ち其の由りて然る所に惑

の由りて然る所を知る。其の由りて然る所を知れ

ば、 則ち一体の盈虚消息、皆な天地に通じ、

# 【現代語訳】

なぜそうなるのかわかるだろうか。 感変(物に応じて動く変化)の九つの端緒について、

#### 語注

疇か予が工を若えん)」(帝がいった、「誰が余の工業をむ。 『尚書』 虞書・舜典に「帝曰、疇若予工(帝曰く、 不尋其本者、莫不致惑。」(『列子』張湛注) 惑うということ。「夫変化云為皆有因而然、 こったときに、理由が〔自身にあることが〕わからず戸 きたしたかが充分にわかっていなければ、実際に事が起 整えるか。」)とある。○不識感変之所起者、事至則惑其 変九端」は、こうした様々な「感変」の中でも占夢にお 化云為、皆有因而然。」(『列子』張湛注)ここでの「感 所由然……自身の精神が何と接触してどのような変化を で取る。○疇……ここでは反語ではなく疑問として読 いて知るべき変化の端緒が九種ある(後出)、との意味 様々な事象と接触することで起きる変化をいう。「夫変 ○感変九端……本来「感変」は、人間の精神と肉体が ○識感変之 事以未来而

化が起こることを言う。 と通ずる人間には、万物との接触によって様々な反応変 を指す。「天地盈虚、与時消息。」(『易』豊)、「消息盈 を言うが、ここでは人間の心身における陰陽の気の変動 於物類……「一体」は人体、「盈虚消息」は事物 ば、実際に事が起こったときに、その理由もわ てどのような変化をきたしたかが充分にわかっていれ 所起者、 るということ。「知八徴六候之常化也、是則識其所由矣。 (『列子』盧重玄解)○一体之盈虚消息、 終則有始。」(『莊子』秋水) 事至則知其所由然……自身の精神が何と接触し 「物類」 は物の種類、 陰陽の気を通じて天地 皆通於天地 万物。 かってい の生滅

夢相擊毀傷、 則夢喜笑恐畏、 肝気盛則夢怒、 日気盛、二日気虚、三日邪寓、 溢、 (夢腰脊両解不属) 則夢大火而燔焫、 何謂気盛 六日直協、 下盛則夢堕、 此気盛之夢、 、陰気盛、 肺気盛則夢恐懼哭泣飛揚 脾気盛則夢歌楽身体重不挙、 七曰比象、八曰反極、 短虫多則夢聚衆、 陰陽俱盛、 甚饑則夢取、 則夢渉大水而恐懼 其類可推也 則夢相殺、 四日体滞、 甚飽則 長虫多則 九日厲 心気盛 夢予、 上盛 陽気 五日

無心脾腎三夢、陰気感人盛則夢大水至夢与夢取五内経脈要精微論、但霊枢経無短虫長虫二夢、内経気盛之夢十有五、詳見黄帝霊枢経淫邪発夢篇、幷

注

#### 校異

出列子、

①芸本は「列子曰、 する。 霊枢経』 注でその出拠を『列子』と明示していることは、 このように、 接の出拠は『黄帝霊枢経』とする方が妥当であろう。 気盛」「相殺」も 則夢飛、 則夢取」とする。 夢大火而燔焫、 ゆる自注が、 淫邪発夢篇に見える。また、本節本文の「陰 下盛則夢堕」の句は『列子』ではなく『黄帝 本文が『黄帝霊枢経』を引用しながら、 実は陳士元によるものでないことを示唆 陰陽倶壮則夢生殺、 『黄帝霊枢経』と一致するため、 陰気壮則夢渉大水而恐懼。 ①が示す本文の中でも、 甚飽則夢予、 陽気壮 いわ 削

【書き下し文】

に曰く比象、八に曰く反極、九に曰く厲妖。何をに曰く体滞、五に曰く情溢、六に曰く直協、七年之。一に曰く気盛、二に曰く気虚、三に曰く邪禹、四本文

盛んなれば則ち腰脊 気盛の夢、 長虫多ければ則ち相撃ちて毀傷するを夢む。此れ ざるを夢む。 れば則ち歌楽し身体重く挙がらざるを夢む。 んなれば則ち喜笑し恐畏するを夢む。脾気盛んな なれば則ち恐懼し哭泣し飛揚するを夢む。心気盛 うれば則ち取るを夢み、甚だ飽けば則ち予うるを を夢み、 大火ありて燔焫するを夢む。陰陽倶に盛んなれ んとして恐懼するを夢む。陽気盛んなれば、 則ち相い殺すを夢む。上盛んなれば則ち飛ぶ 肝気盛んなれば則ち怒るを夢む。肺気盛ん 下盛んなれば則ち堕つるを夢む。 其の類推すべきなり。 短虫多ければ則ち聚衆するを夢み、 両つながらに解かれて属せ 甚だ饑 則ち

る五句は『列子』に出ず(#5)。 気盛の夢十有五、詳くは『黄帝霊枢経』淫邪発夢 気盛の夢十有五、詳くは『黄帝霊枢経』淫邪発夢 な五句は『列子』に出ず(ま5)。

# [現代語訳]

か気盛と謂う。

陰気盛んなれば、

則ち大水を渉ら

ば、 ば、 気 ば、大火事があり焼かれる夢を見る。 合って負傷する夢を見る。 ばなれになって繋がらない夢を見る。 が盛んであれば、腰 歌い楽しむも、身体が重くてあがらない夢を見る。腎気 飛んだりする夢を見る。心気が盛んであれば、 見る。肺気が盛んであれば、恐れおののいて哭泣したり 盛んであれば落ちる夢を見る。ひどく飢えた場合であれ 盛んであれば、殺しあう夢を見る。〔身体の〕上部 越えようとして、おそれる夢を見る。 何を気盛と言うのか。陰気が盛んであれば、大きな川を 溢、 、が集まる夢を見る。長虫が多ければ〔誰かと〕殴り が盛んであれば、飛ぶ夢を見るし、下部 人に与える夢を見る。肝気が盛んであれば怒る夢を 人から取る夢を見るし、飽き足りている場合なら 六に直協、 何かに恐れを抱く夢を見る。脾気が盛んであれば、 に気盛、二に気虚、三に邪寓、 は推測できる。 七に比象、八に反極、 (下半身) と背骨 (上半身) が離れ これが気盛の夢であり、 陰陽の気がともに 陽気が盛んであれ 四に体滞、 短虫が多ければ、 九に厲妖である。 〔の気〕 喜び笑 五に情

#### 語注

五臓、 状態を治癒するという臨床的知識に基づく。 る夢。 える(注7)。 内容によって疾病のある部位を特定し、気が過剰である みる夢。 気虚……五臓における気が不足することでみる夢。 能見衆夢」(巻三) いても定かでない。 傷脾…憂傷肺…恐傷腎。」(陰陽応象大論)とある(産の)。 動と五臓との関連については『黄帝内経素問』に「人有 のことが起こること。 協……夢で見たものと覚醒後に見るものが一致すること。 寓……邪気が五 ○大火而燔焫……大火事で身を焼くこと。○短虫・長虫 ○比象……象徴的な夢。○反極……夢に見たことと反対 ○体滞……身体に対する外的刺激が反映されることでみ ○気盛……五臓における気が余りあることでみる夢。 ·不明。 化五気、 ○情溢……過度な感情の高まりからみる夢。○直 ○肝気盛則夢怒~心気盛則夢喜笑恐畏……夢の また、 以生喜怒悲憂恐。…怒傷肝…喜傷心…思 臓や他の器官に侵犯することでみる夢。 虫が気盛とどのように結びつくかにつ のように虫が夢見に関わる内容が見 段成式 ○厲妖……悪鬼がとりつくことで 『酉陽雑俎』には 人の精神活 「歓喜根虫

#### 原文] -

本文 見菌香・生草、 夢飲食不足、 何謂気虚、 虚則夢見救火・ 溺人、得其時則夢伏水中、若有畏恐、 得其時則夢見兵戦、 肺気虚則使人夢見白物、 得其時則夢築垣蓋屋、 陽物、 得其時則夢伏樹下、不敢起、 得其時則夢燔灼、 腎気虚則使人夢見 此気虚之夢、 肝気虚則夢 見人 脾気虚則 斬 舟 心気 ш

気不足故也、五臓気虚十夢、詳見内経盛衰論、蓋陽気有余、陰

注

其類可推也

# 【書き下し文】

本文 何をか気虚と謂う。肺気虚なれば則ち人をして夢本、其の時を得れば則ち夢に兵戦を見る。腎気虚め、其の時を得れば則ち水中に伏し、畏恐あるがごときを夢む。肝気虚なれば則ち夢に兵戦を見る。腎気虚め、其の時を得れば則ち水中に伏し、畏恐あるがごと見、其の時を得れば則ち水中に伏し、畏恐あるがごと見、其の時を得れば則ち夢に兵戦を見る。腎気虚を夢む。心気虚なれば則ち夢に火を救い陽物でるを夢む。心気虚なれば則ち夢に火を救い陽物でるを夢む。心気虚なれば則ち夢に火を救い陽物でるを夢む。心気虚なれば則ち夢に火を救い陽物でるを夢む。心気虚なれば則ち人をして夢を見、其の時を得れば則ち大き見せしめ、

其の類推すべきなり。ば則ち垣を築き屋を蓋うを夢む。此れ気虚の夢、

論〕蓋し陽気余りありて、陰気足らざるが故な盛衰論に見ゆ。〔以下、『黄帝内経素問』方盛衰五臓気虚の十夢、詳しくは『内経〔素問〕』〔方〕

注

# 現代語訳

できる。 できる。 できる。 できる。 できる。 できる。 ある時は戦争を夢みる。 い型の船や溺れた人の夢を見る。 ある時は烈火に 気の盛んなもの(太陽や雷)を夢みる。 所ない夢を見る。 が起になると大型 とを夢に見る。 ある時は戦争を夢みる。 が起になると大型 とを夢に見る。 ある時は関下に伏して、起きあが にない。 が起になると が起になると 大型 とを夢に見る。 ある時は関下に伏して、起きあが ないの盛んなもの(太陽や雷)を夢みる。 ある時は水中に潜り、 たり陽 たがれる夢を見る。 ある時は対下に伏して、起きあが なると がこなると がこなると がこなると がこと がこると がこと がこれない。 ある時は対したり陽 になると 変える。 ある時は担根(または城壁)や家屋を見 を夢に見る。 ある時は担根(または城壁)や家屋を見 ないこと を夢に見る。 ある時は近根(または城壁)や家屋を見 ないこと を夢に見る。 ある時は地関下に伏して、起きあが なると がになると がとある。 がとなると がとある。 がとなると がとなる。 がとなる。 がとなると がとなると がとなると がとなると がとなると がとなると がとなる。 がとなると がとなる。 がとなると がとなると がとなる。 がして、 がとなる。 が

#### 語注

○気虚……五臓の気が不足することでみる夢は、五臓に ○気虚……五臓の気が不足することでみる夢は、五臓に 不足ではなく陽気の過剰を意味する。 不足ではなく陽気の過剰を意味する。 不足ではなく陽気の過剰を意味する。 不足ではなく陽気の過剰を意味する。 不足ではなく陽気の過剰を意味する。 不足ではなく陽気の過剰を意味する。 の気が相対的に過 無温に に過れが、 にはなる。 にはなな。 にはなる。 にはなる。 にはなる。

何謂邪寓、 溲便、 淵 夢飛揚、見金鉄之奇物、 於脾則夢見丘陵大沢、 則夢斬首、 客於胆則夢闘訟自刳、 苑中、 没居水中、客於膀胱則夢飛行、客於胃則夢飲 客於大腸則夢田野、客於小腸則夢聚邑街衢 此淫邪之夢、 客於脛則夢行走而不能前及、居深地・ 客於股肱則夢礼節拝起、 厥気客於心則夢見丘山煙火、 其類可推也 客於陰器則夢接内、客於項 壊物風雨、 客於肝則夢山林樹木、 客於腎則夢臨 客於胞腫則夢 客於肺 則

注

人妄夢、

列子、以浮虚為疾者、 則夢揚、 以沈実為疾者、 則

①芸本は

②帰本は 「衝街衢」とするが、ここでは芸本と『黄帝霊 「屋」に作る。

③帰本は「衍」に作るが、ここでは芸本が「器」とする 枢経』が「衝衢」とするのに従い改めた。

注

のに従い改めた。

④帰本は「陰」に作るが、ここでは 気」とするのに従い改めた(注1)。 「黄帝内経素問 が

【書き下し文】

何をか邪寓と謂う。厥気 に客すれば則ち飲食を夢む。 を見る。腎に客すれば則ち淵に臨み、水中に没居 金鉄の奇物を見る。肝に客すれば則ち山林樹木を 丘山煙火を見る。 脾に客すれば則ち夢に丘陵大沢、壊物風雨 小腸に客すれば則ち聚邑街衢を夢 膀胱に客すれば則ち飛行を夢む。胃 肺に客すれば則ち夢に飛揚し、 心に客すれば則ち夢に 大腸に客すれば則ち

田野を夢む。

する能わずして、深地・節・苑の中に居るを夢ち斬首を夢む。脛に客すれば則ち行き走るも前及 陰器に客すれば則ち接内を夢む。項に客すれば則 客すれば溲便を夢む。 む。股肱に客すれば則ち礼節拝起を夢む。 胆に客すれば則ち闘訟して自ら刳くを夢む。 此れ淫邪の夢、 其の類推す 胞腫に

見ゆ。『内経』に「少気の厥は人をして妄りに夢 ち揚がるを夢む。沈実を以て疾を為す者は、 厥気 内を襲うの十五夢、詳しくは『霊枢経』 みせしむ」と云う(注11)。 『列子』〔周穆王〕、浮虚を以て疾を為す者は、 削

溺るるを夢む(注12)。

【現代語訳】

に宿れば田野を夢みる。 夢みる。肺に宿れば夢に飛揚したり、金鉄でできた珍物 れば飛行の夢を見る。胃に宿れば飲食の夢を見る。 の前に立ったり、水中に沈んでいく夢を見る。 や大きな沢、壊れた建物や風雨を夢みる。腎に宿 を見る。肝に宿れば山林樹木を夢みる。 何を邪寓と言うのか。邪気が心に宿れば丘山や煙火を 小腸に宿れば集落や通りの夢を 脾に宿れば丘陵 ñ

見る。 類は推測することができる。 に宿れば小便の夢を見る。 股肱に宿れば礼拝して立ちあがる夢を見る。 ことができず、 に宿れば斬首の夢を見る。 る夢を見る。 胆に宿れば言い争ったり、 生殖器官に宿れば性交の夢を見る。うなじ 深地や窪地、 これが淫邪の夢であり、 脛に宿れば走っても前に進む 庭園の中にいる夢を見る。 自分で自分を斬りつけ 膀胱と直腸 その

#### 語注

ても「厥」という。 ら立ちあがり上部にのぼることで手足が冷える病につい 寒論注釈』弁太陰病脉証并治法第十)また、 名。「凡厥者、 得入于陰、 経脈証法)、「厥気客於五蔵六府、 夜臥不寧。」 ○厥気…… [[釈名] 釈疾病) 不得入于陰。行於陽則陽気盛、 **卵」は窪地。** ○深地宛苑……「 陰虚、故目不瞑。」(『霊枢』邪客) 邪気。「 (張元素 陰陽気不相順接、便為厥。」(成無巳 ○街衢……四方八方に延びた通り。 「穿地曰窌。」 邪気客于心、 「厥、逆気従下厥起上、行入心脇也。」 『医学啓源』 深地」は城の周辺にめぐらせた (『周礼』 考工記 則衛気独衛其外、行於 五臟六腑除心包絡十一 則夢烟火、 陽気盛則陽橋陷、 邪気が下か 「厥」は病 心脈気短、 1. 匠人

> 厥逆、 こと。 ……「胞腫」 のむくみ。「陽明所至為浮虚。」(『素問』六元正経大論 則夢溺……「浮虚」は、 きであろう。○以浮虚為疾者、 の一部とするが、本来は気虚に関連するものと考えるべ 方盛衰論)。この「厥」は気の流れが逆流する厥逆の状 している状態。「三陽絶、 ……「少気」は、 「浮虚、 (王冰注)『夢占逸旨』注は「少気之厥」による夢も邪寓 〔張介賓『類経』〕「溲」 厥逆の症状が重いと混迷した夢をみる。「気之少有 張湛伝「遺失溲便」章懐注) 則令人妄為夢寐。其厥之盛極、則令人夢至迷乱。 薄腫。」(王冰注)「沈実」は気が沈んで重苦し は膀胱と直腸。 三陽三陰の脈が微弱で体内の気が不足 は小便。「溲、 陽明の気が原因で発症する皮膚 三陰微、是為少気」(『素問 胞 則夢揚、 ○少気之厥、 溲脬也。 小便也。」(『後漢 以沈実為疾者 腫、 令人妄夢 大腸也。

態。

原文]-

本文

何謂体滞、

口有含則夢強

言而喑、

足有絆則夢強行

臥 而 語彩衣則夢虎豹、 躄、 其類可推也 首堕 一枕則夢躋高而 髪挂樹枝則夢倒懸 墜。 臥 藉徽縄則 此体滞之 夢

困節倉城、

逆牆六分。」鄭玄注)

○客於胞腫則夢溲便

注

列子藉带而寝者則夢蛇、

飛鳥銜髮則夢飛

(204)

#### 校異

①芸本は「掛」に作る。

て「銜」に改めた。
②帰本は「啣」に作る。ここでは芸本と『列子』に従っ

# 【書き下し文】

夢む。飛鳥 髪を銜めば、則ち飛ぶを夢む(注)。注〕『列子』〔周穆王〕帯を藉いて寝ぬれば、則ち蛇を夢む。此れ体滞の夢、其の類推すべきなり。

## **現代語**

に登って墜ちる夢を見る。寝るときに太い縄を下敷きにて歩けなくなる夢を見る。頭が枕から落ちると、高い所に何か絡まっていると、無理に行こうとしても足が萎えを無理に言おうとしても口がきけなくなる夢を見る。足

る。

これが体滞の夢であり、その類は推測することができが樹の枝に引っかかると、逆さまに吊られる夢を見る。が樹の枝に引っかかると、逆さまに吊られる夢を見る。毛髪の鮮やかな衣服が敷いてあると虎や豹を夢に見るし、模様してしまうと、蛇(または蛇や蝮)を夢に見るし、模様

#### 語注

○夢強言而喑……「強言」は、何とかしてものを言おう○夢強言而喑……「強行」は押し切って無理に行こうとすをこと。「知足者富、強行者有志。」(『老子』第三十三を〕「躄」は足が萎えて歩けなくなること。「躄、謂攣躄、足不得伸以行也。」(『素問』痿論「生痿躄也」王冰躄、足不得伸以行也。」(『素問』痿論「生痿躄也」王冰躄)〇微縄……三本より合わせた太い綱。「徽、衰幅也。三合而糾之也。」(段玉裁注)○倒懸……逆さにぶら下が三合而糾之也。」(段玉裁注)○倒懸……逆さにぶら下が三合而糾之也。」(段玉裁注)○倒懸……逆さにぶら下が一段強言而喑……「強言」は、何とかしてものを言おう

#### 【原文】-

(『抱朴子』仙薬)「県」は「懸」に通ずる。

匿、過憂則夢嗔、過哀則夢救、過忿則夢詈、過驚||本文||何謂情溢、過喜則夢開、過怒則夢閉、過恐則夢閉、過恐則夢

# 則夢狂、此情溢之夢、其類可推也

#### 校異

①帰本は「過衍憂」とするが、「衍」は衍字として削除

# 【書き下し文】

図 何をか情溢と謂う。喜びを過ぐれば則ち開くを夢み、怒りを過ぐれば則ち閉じるを夢み、恐れを過ぐれば則ちを夢み、なるを夢み、哀しみを過ぐれば則ち救うを夢み、忿なるを過ぐれば則ち置るるを夢み、憂いを過ぐれば則ち嗔なるをあれば則ち置るるを夢み、憂いを過ぐれば則ち開くを夢といる。

# 現代語訳

測することができる。 一切を情溢と言うのか。過度に悪れるとかくれる夢を見、過度に療えると怒る夢を見、過度に悲しむと救う夢を見、過度に憂えると怒る夢を見、過度に悲しむと救う夢に怒ると閉じる夢を見、過度に恐れるとかくれる夢をに怒ると閉じる夢を見、過度に喜ぶと開く夢を見、過度

#### 語注

○過喜則夢開、過怒則夢閉……「開」は、閉じていたも ○過喜則夢開、過怒則夢閉……「開」は、閉じていたも のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 では、整理では、 では、 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 では、 では、 では、 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 では、 では、 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。 のが開く、または閉塞した状況が良い方に向かうこと。

#### 原文 -

也、甲与君不見、所夢見甲与君、象類之也、見君、明日則見君矣、如夢甲与君、甲与君則不見[注] 王充論衡、人有直夢、夢見甲、明日則見甲矣、夢||本文| 何謂直協、夢君則見君、夢甲則見甲、

#### 校異

\*芸本は、「論衡」の下に「曰」を付す。 ①芸本は「人亦有」とする。

# 【書き下し文】

||本文||何をか直協と謂う。君を夢みれば則ち君を見

(※型)。 り(※型)。 (※型)。 り(※型)。 (※型)。 (※)。 (※型)。 (※)

# (現代語訳)

を見、甲を夢みれば〔現実で〕甲を見る。何を直協と言うのか。君主を夢みれば〔現実で〕君

#### 語注

○直夢……夢にみたものを覚醒後にも見ること。正夢。 ○直夢……夢にみた甲や君主は現実世界に実在する。「直夢」に類する語には、『周礼』の「正夢」(春像であり、その仮象は直接の経験の反映に過ぎないとす像であり、その仮象は直接の経験の反映に過ぎないとする。」 「直夢皆象也」(紀妖)とし、直夢はどれも仮のを覚醒後にも見ること。正夢。

#### 原文 :

# 本文 夢鹿則得鹿

列 子**\*** 之国相、国相曰、夢与不夢、臣所不能弁也 之、以聞鄭君、曰、嘻、士師将復夢分人鹿乎、 夢得鹿妄謂之実、彼真取若鹿、而与若争鹿、室人 之処、又夢得之之主、爽旦、案所夢而尋得之、遂 真夢者矣、室人曰、若夢薪者之得鹿邪、詎有薪者 之、恐人見之也、遽蔵諸隍中、覆以蕉、不勝 又謂夢認人鹿、 訟而争之士師、士師曰、若初真得鹿妄謂之夢、 何用知彼夢我夢耶、薪者帰不厭失鹿、其夜真夢蔵 今真得鹿、是若之夢真耶、 傍人有聞者、 向薪者夢得鹿、而不知其処、吾今得之、彼直 俄而遺其所蔵処、遂以為夢焉、 鄭人有薪於野者、 無人得鹿、今拠有此鹿、 用其言而取之、既帰告其室人 遇駭鹿、 夫曰、吾拠得鹿、 御 順塗而詠 而擊之、 請二分

#### 【校異】

「蕉」に改めた。「蕉」に改めた。ここでは芸本と『列子』に従い

「詠」に改めた。
②帰本は「謎」に作る。ここでは芸本と『列子』に従い

③芸本は「旁」に作る。

失えるに厭らず、其の夜真に之を蔵せる処を夢

④帰本は「遽」に作る。ここでは芸本と『列子』に従い 拠」に改めた。

⑤芸本は「之之」とする。

\*芸本は、「列子」の下に「曰」を付す。

本文 書き下し文 鹿を夢みれば則ち鹿を得。

り、其の言を用て之を取る。既に帰りて其の室人。 の之を見んことを恐る。遽かにして諸を隍中に蔵の之を見んことを恐る。遽かにして諸を隍中に蔵 に告げて曰く、「向に薪とる者夢に鹿を得て、其 にして其の蔵せる所の処を忘れ、遂に以て夢と為 し、覆うに蕉を以てす。其の喜びに勝えず、 ける鹿に遇い、御して之を撃ち、之を斃せり。 『列子』〔周穆王〕、鄭人に野に薪とる者あり。 駭 塗に順いて其の事を詠う。 傍人に聞く者あ

> た復夢に人の鹿を分くるか」と。之を国相に訪請う」と。以て鄭君に聞す。曰く、「嘻、士師将は 鹿を取りて、若と鹿を争い、室人も又た夢に人の。 得て之を夢なりと謂い、真に夢に鹿を得て、妄り に争う。士師曰く、「若(=樵)は初め真に鹿を う。国相曰く、「夢と夢ならざると、臣の弁ずる 鹿を認めたりとして、人の鹿を得ること無しと謂 み、又た之を得たるの主を夢む。爽旦、夢みし処 能わざる所なり」と(注15)。 に之を実なりと謂えり。彼(=傍人)は真に若が を案じて尋ねて之を得たり。遂に訟して之を士師 今此の鹿あるに拠りて、之を二分せんことを

現代語訳

鹿を夢みると鹿を得る。

語注

薪とる者の

みたる者なり」と。室人曰く、「若じ

の処を知らず。吾今之を得たり。彼は直だ真に夢

鹿を得たるを夢みるか。詎ぞ薪とる者あらんや。

夫曰く、「吾の鹿を得たるに拠れば、何を用て彼

真に鹿を得たり。是れ若の夢真なるか」と。

の夢我の夢を知らんや」と。薪とる者帰りて鹿を

際に「鹿を夢みて鹿を得た」のは樵だが、それでも最初 別が実は曖昧なものにすぎないことを言わんとする。実 ぶりを登場人物それぞれの立場から描き、現実と夢の区 ○鄭人~……獲鹿をめぐるこの話は、現実と夢との錯綜

夢だと思い、事の経緯を呟きながら歩いた。○士師……夢だと思い、事の経緯を呟きながら歩いた。○士師……を物を得た」という考えも、夢と現実と鹿を得る夢をみて鹿を得た」という考えも、夢と現実と成、から堀。「蕉」は、きあさ。○不勝其喜、俄而遺其は、から堀。「蕉」は、きあさ。○不勝其喜、俄而遺其は、から堀。「蕉」は、きあさ。○不勝其喜、俄而遺其は、から堀。「蕉」は、きあさ。○不勝其喜、俄而遺其は、から堀。「蕉」は、きあさ。○不勝其喜、俄而遺其は、から堀。「焦が〕鹿を夢みて〔その話を聞いた自いる。傍人の「〔焦が〕鹿を夢みて〔その話を聞いた自いる。傍人の「〔焦が〕鹿を夢みて〔その話を聞いた。○士師……

【原文】-----

本文 夢粟則得粟、

注]見草木篇、劉浩夢籬下粟注、

校異

①芸本は「解見」とする。

【書き下し文】

[注] 草木篇、「劉浩 籬下の粟を夢む」の注に見ゆ(註1)。 |本文| 粟を夢みれば則ち粟を得。

【現代語訳】

栗を夢みると栗を得る。

語注

○草木篇……『夢古逸旨』外篇所収。植物を夢に見た事例を収録する。○劉浩……『晋書』には「劉殷」とある。経史に通じ、永嘉の乱の後は劉聡(五胡十六国時る。経史に通じ、永嘉の乱の後は劉聡(五胡十六国時にも貢献した。また孝心の厚いことでも知られる。「夢にも貢献した。また孝心の厚いことでも知られる。「夢にも貢献した。また孝心の厚いことでも知られる。「夢にも貢献した。また孝心の厚いことでも知られる。「夢にも貢献した。また孝心の厚いことでも知られる。「夢にも貢献した。」(『釈名』釈宮室)

【原文】-----

本文 夢刺客則得刺客、

曰、将有変耶、乃索寝中得刺客、手殺之、客害己、既寤、聞榻上宝剣鏗然有声、躍起、抽剣子、貞明元年、使刺客入末帝寝中、末帝方寐夢刺」 五代史、後梁康王友孜、目重瞳、嘗自負当為天

#### 校異

①芸本は 「傝」に作る。

\*芸本は 「五代史」の下に「曰」を付す。

本文

『五代史』、後梁の康王友孜、目は重瞳、刺客を夢みれば則ち刺客を得。 客を得、手ずから之を殺す(注意)。 鏗然として声あるを聞き、躍起し、剣を抽きて日ますが く、「将に変あらんや」と。乃ち寝中を索めて刺 の己を害するを夢む。既に寤し、榻の上の宝剣 末帝の寝中に入らしむ。末帝 寐ぬるに方り刺客 天子と為るべきを自負す。貞明元年、 刺客をして 嘗て当に

# 現代語訳

刺客を夢みると〔実際に〕刺客が現れる。

#### 語注

察知した末帝に殺された。○重瞳……一つの眼球に二つ 末帝を暗殺しようとしたが、刺客の夢を見て身の危険を 朱友孜(または朱友敬)。康王は封号。刺客を送り兄の ○康王友孜……後粱(九○七~九二三)太祖の子である

> ○鏗然……金属や石のなる音。「鍾声鏗者、 瞳であったとされている。「舜目蓋重瞳子、又聞項羽亦 鏗鏗然矣。」(『礼記』楽記「鍾声鏗」孔穎達疏 重瞳子。」(『史記』項羽本紀)○貞明元年……九一五年。 の瞳があること。貴人の相として知られ、舜や項羽も重 言金鍾之吉

# 【原文】-----

本文 夢受秋駕則受秋駕

師 呂氏春秋、尹儒学御三年而無得、 師言所夢、 明日往朝、其師呼而謂之曰、今日将教女以秋 尹儒反走北面再拝曰、 固秋駕也 今昔臣夢受之、先為其 夜夢受秋駕於

#### 校異

①芸本は「子」に作る。

\*芸本は「呂氏春秋」の下に「曰」を付す。

# 【書き下し文】

本文 夢に秋駕を受くれば則ち秋駕を受く。 『呂氏春秋』 〔不苟論博志〕、尹儒 御を学ぶこと三 年なるも得ること無し。夜 秋駕を師に受くるを

夢む。明日 往きて朝す。其の師呼びて之に謂い

うに、固に秋駕なり(注19)。 と。尹儒 反走し北面再拝して曰く、「今昔 臣夢 に之を受く」と。先に其の師の為に夢みし所を言 て曰く、「今日将に女に教うるに秋駕を以てせん」

# 現代語訳

れる。 夢の中で秋駕を伝授されれば〔実際に〕秋駕を伝授さ

#### 語注

以善馭不更逸也。」(『集韻』) 訓にも見える(注20)。 ○秋駕……馬を御する術。 「秋秋、馬騰驤也。所謂秋駕! 同様の話は『淮南子』道応

# 原文] ---

本文 此直協之夢、其類可推也、 何謂比象、 将涖官則夢

晋書、或問殷浩、将涖官而夢棺、 棺、将得銭則夢穢、 也、殷浩曰、官本臭腐、故得官而夢尸銭本糞土、

将得財而夢糞何

故得銭而夢穢、

時人以為名言、

#### 校異

①芸本は「浩日」とする。

\*芸本は「晋書」の下に「曰」を付す。

# 【書き下し文】

本文 此れ直協の夢、其の類推すべきなり。 将に銭を得んとすれば則ち穢を夢みるなり。 と謂う。将に官に涖かんとすれば則ち棺を夢み、 何をか比象

注 を夢みるなり」と。時人以て名言と為す(注21)。 『晋書』、或るひと殷浩に問う、「将に官に涖かん む。銭は糞土に本づく。故に銭を得るに而して穢 は本と臭腐なり。故に官を得るに而して尸を夢 而して糞を夢みるは何ぞや」と。殷浩曰く、「官 とするに而して棺を夢み、将に財を得んとするに

# 現代語訳

見、財産を得ようとすれば穢れたものを夢に見る。 これが直協の夢であり、その類は推測することができ 何を比象と言うのか。官位につこうとすれば棺を夢

#### 語注

○将涖官則夢棺……敦煌文書S.2222「周公解夢書残卷」

落とされた。『晋書』に伝あり。 落とされた。『晋書』に伝あり。 落とされた。『晋書』に伝あり。 落とされた。『晋書』に伝あり。 落とされた。『晋書』に伝あり。 落とされた。『晋書』に伝あり。 落とされた。『晋書』に伝あり。 高い、に「夢見身入棺、遷進、吉」(雑事章第三)、「夢見路上屎尿、 とある。○殷浩……敦 進文書S.3908「新集周公解夢書一巻」に「夢見路上屎尿、 とある。○殷浩……敦 道文書S.3908「新集周公解夢書一巻」に「夢見路上屎尿、 とある。○殷浩……敦 ででで就くが、北伐に失敗し桓温に弾劾されて庶人に 下の位に就くが、北伐に失敗し桓温に弾劾されて庶人に

【原文】-----

注 説苑、将陰夢水、将晴夢火、本文 将貴顕則夢登高、将雨則夢魚、

#### 校異

\*芸本は「説苑」の下に「曰」を付す。

# 【書き下し文】

将に雨ふらんとすれば則ち魚を夢み、本文 将に貴顕ならんとすれば則ち高きに登るを夢み、

# 【現代語訳】

続く〕
し、雨が降ろうとする場合は魚を夢に見るし、〔次節にし、雨が降ろうとする場合は魚を夢に見るし、〔次節に貴顕な位につこうとする場合は高所に登る夢を見る

#### 語注

○将貴顕則夢登高、将雨則夢魚……高所に登る夢が貴顕 ○将貴顕則夢登高、将雨則夢魚……高所に登る夢が貴顕 の予兆とされる説はよく見られるもので、『論衡』には 「必夢占之知、知楼台山稜、官位之象也」(紀妖)とあ る (注3)。○将陰夢水、将晴夢火……類似の記述は『列子』 こし、 京島貴」(舟車橋市穀章第十六)、S.0620「占 見登山壟、主高貴」(舟車橋市穀章第十六)、S.0620「占 見登山壟、主高貴」(舟車橋市穀章第十六)、S.0620「占 見登山壟、主高貴」(舟車橋市穀章第十六)、S.0620「占 見登山壟、主高貴」(舟車橋市穀章第十六)、S.0620「占 見登山壟、主高貴」(舟車橋市穀( 「おり、「将晴」については記述がない。(注5)を参 ており、「将晴」については記述がない。(注5)を参 でおり、「将晴」については記述がない。(注5)を参

|本文| 将食則夢呼犬、将遭喪禍則夢衣白、将沐恩寵則夢【原文] ------

口舌争訟則夢歌舞、可推也、何謂反極、有親姻燕会則夢哭泣、有哭泣衣錦、謀為不遂則夢荊棘泥塗、此比象之夢、其類

獵、列子、夢飲酒者憂、夢歌舞者哭、注 莊子、夢飲酒者、旦而哭泣、夢哭泣者、旦而田

校異

であるため、ここでは芸本に従い「遂」に改めた。①帰本は「軌」のような字に作るが不鮮明。判読は困難

\*芸本は「列子」の下に「曰」を付す。\*芸本は「荘子」の下に「曰」を付す。

【書き下し文】

夢、其の類推すべきなり。何をか反極と謂う。親恩寵を沐けんとすれば則ち錦を衣るを夢み、誤為思確を満げずんば則ち荊棘泥塗を夢む。此れ比象の要禍に遭わんとすれば則ち白を衣るを夢み、将に喪禍に食らわんとすれば則ち犬を呼ぶを夢み、将に

哭泣す。夢に哭泣する者は、旦にして田獵『荘子』〔斉物論〕、夢に酒を飲む者は、旦にして口舌・争訟あれば、則ち歌舞を夢む。

姻燕会あれば、則ち哭泣するを夢む。

哭泣

注

い、夢に歌舞する者は哭す(誰名)。 「列子』〔周穆王〕、夢に酒を飲む者は憂

【現代語訳】

(何かを)食らおうとする場合は犬を呼ぶ夢を見、悪 (何かを)食らおうとする場合は白い衣服を着る夢を見、恩寵を受 けようとする場合は錦衣を着る夢を見、事を謀ってもそ れが成功しない場合はいばらや泥道を夢に見る。これが 比象の夢であり、その類は推測することができる。何を 比象の夢であり、その類は推測することができる。何を というのか。〔婚姻という慶事によって〕姻族〔を は象こと〕や宴会があれば、哭泣する夢を見、恩寵を受 に〕哭泣・いさかい・訴訟争いがあれば、歌や舞の夢を し、要を見、思寵を受 る。

語注

「夢見唱歌者、有口舌」(仏道音楽章第八)とある。訟則夢歌舞……敦煌文書S.3908「新集周公解夢書」に……「親姻」は姻族、「燕会」は宴会。○有哭泣口舌争○荊棘泥塗……障害になるもののたとえ。○親姻燕会

注

列子、将陰夢火、将疾夢食、 仏書、凍人夢衣、饑人夢飽、

失、黄山谷、饑人常夢飽、病人常夢医 蘇東坡詩曰、 饑人忽夢飯甑裂、 夢中一 飽、

校異

①ここでは芸本と黄山谷「謫居黔南十首」に従い「飽」 を補った。

\*芸本は「列子」の下に「曰」を付す。

\*芸本は「黄山谷」の下に「曰」を付す。 \*芸本は「仏書」の下に「云」を付す。

【書き下し文】

本文 寒ければ則ち暖を夢み、饑うれば則ち飽くを夢 み、病めば則ち医を夢む。

『列子』〔周穆王〕、将に陰ならんとすれば火を夢 み、将に疾ならんとすれば夢に食らう(注意)。

夢む(注27)。 『仏書』、凍うる人は衣を夢み、饑うる人は飽くを

黄山谷、「饑うる人は常に飽くるを夢み、病める を夢む。夢中の一飽百憂失す」と(注28)。 蘇東坡詩に曰く、「饑うる人は忽ち飯甑の裂くる」

人は常に医を夢む」と(注22)。

現代語訳

百憂

る夢を見るし、病気になれば医者を夢に見る。 寒ければ暖かさを夢に見るし、空腹であれば満腹にな

語注

○飯甑……米をふかすための竹のせいろ。

原文]--

本文 憂孝則夢赤衣絳袍、 之夢、其類可推也、 慶賀則夢麻苴凶服、此乃反極 何謂厲妖、 強死之鬼、依人為

注 良霄三世執其政柄而強死為厲、不亦宜乎、 左伝、鄭伯有為厲、子産曰、用物精多則魂魄 匹夫匹婦強死而魂魄猶能憑依於人、以為淫厲、 強

【校異】

①芸本には「乃」の字がない。

【書き下し文】

本文 孝を憂えば則ち赤衣絳袍を夢み、慶賀あれば則ち

依りて殃を為す。すべきなり。何をか厲妖と謂う。強死の鬼、人にすべきなり。何をか厲妖と謂う。強死の鬼、人に麻苴凶服を夢む。此れ乃ち反極の夢、其の類推

注 『左伝』 [昭公七年]、鄭の伯有 厲と為る。子産日 大「物精を用うること多ければ則ち魂魄強し、 に夫匹婦 強死すれば而して魂魄猶お能く人に憑 がれた。 がれば 別て発厲と為る。況んや良 霄は三世其の がれば 別で発属と為る。況んや良 霄は三世其の がれば 別で発展と為る。 のがれば則ち魂魄強し、

# 現代語訳

なった者が、人に憑依してわざわいを起こすのである。きる。何を厲妖と言うのか。非業の死を遂げて亡霊とる。これが反極の夢であり、その類は推測することがでことがあれば〔葬儀の象徴である〕杖や喪服を夢に見ある〕緋色の着物や深紅の上着を夢に見るし、めでたいめる〕緋色の着物や深紅の上着を夢に見るし、めでたい久母の喪に服することを案じていれば〔長寿の象徴で

#### 語注

○麻苴凶服……「麻」「苴」は共に麻の雌株。「凶服」は下至跗者也。袍、苞也。苞、内衣也。」(『釈名』釈衣服)○赤衣絳袍……緋色の上着と深紅の着衣。「袍、丈夫著

喪服。 六年、二十七年、昭公七年に見える。伯有が鬼となるこ を述べた。○淫厲……わざわい、たたり。○良霄……伯 魄が人を怨む方向に向かえば祟りを起こす鬼になること を多く摂取できれば魂魄の力は強くなること、強力な魂 凝って魂となること、また身体を養う諸物から精良の気 のは魄(生理機能の中枢)で、その後は陽の気が身中に とについて問われた子産は、人が生まれると最初に動く についての事跡は、『左伝』襄公十一年、十三年、 てたたりを起こした(『夢占逸旨』宗空篇に前出)。 された伯有は、襄公三十年、自身に手を下した者に対し 為厲…伯有は公子去疾(鄭穆公の庶子)の孫。鄭人に殺 (『左伝』文公十年「三君皆将強死」孔穎達疏) 業の死を遂げること。「強、健也。無病而死、 ○強死之鬼……「強死」は不自然に死ぬこと、 謂被死也。 ○鄭伯有

【原文】-----

有のこと。

「in 」 ヨートは、木月2代 |本文 | 聚怨之人、鬼将有報

有報、白孔六帖、休明之代、物不為妖、聚怨之人、白孔六帖、休明之代、物不為妖、聚怨之人、

#### 校異

\*芸本は「白孔六帖」の下に「日」を付す。

# 【書き下し文】

本文 聚怨の人は、 鬼将に報いることあらんとす。

の人は、鬼将に報いることあらんとす(注31)。 『白孔六帖』、休明の代は、 物 妖を為さず。聚怨

# 現代語訳

ようとする。 周囲から怨まれる人は、鬼がそれに応じた報いを与え

#### 語注

蓋精気之依物者也。気乱於中、物変於外」(『捜神記』巻 不出一年有大喪。」(『唐開元占経』巻一一四)、「妖怪者、 な現象が生じること。「地鏡曰、宮中竈及釜甑鳴響者、 物不為妖……竈鳴や釜鳴のように、動植物や道具に異常 遷于周。徳之休明、 ○休明……徳が立派に輝いていること。「商紂暴虐、 雖小重也。」(『左伝』宣公三年)○

本文 原文 --其見之夢寐者、則由己之志慮疑猜、 祁也、 後鬼厲乗其類瑕、 乃若晋侯受縶於秦伯、 肆其怪孽、 燕王貶徙於房州 故禍災立著、 神気惛乱、 福祉難

則

温公通鑑、 左伝、秦伯執晋侯曰、 燕王忠貶徙房州、数有妖夢、 亦晋之妖夢是践

注

又其次矣、

#### 校異

①帰本は「候」に作るが、ここでは芸本に従い「侯」に 改めた。

\*芸本は「通鑑」の下に「日」を付す。

# 【書き下し文】

本文 著<sub>ら</sub>れ、 りて神気皆乱し、然る後に鬼属、其の類瑕に乗じ、世紀等に見る者は、則ち己の志慮疑猜に由其れ之を夢寐に見る者は、則ち己の志慮疑猜に由 秦伯に受け、燕王の房州に貶徙せらるるが若き著れ、福祉は祁んとなり難し。乃ち晋侯の繋をいる。 其の怪孽を肆にす。故に禍災は立ちどころに は、則ち又た其の次なり。

『左伝』〔僖公十五年〕、秦伯 「亦た晋の妖夢をば是れ践むなり」と<br/>(注32)。 晋侯を執えて曰く、

注

るに、数ば妖夢あり (#33)。 温公 『通鑑』、燕王 忠 「房州に貶徙せられんとす

## 【現代語訳

鬼を夢に見る者は、そうした夢にならぶものであいてがいたことに、そうした夢にならがものであいただころに起こり、幸いも盛んにはなり難い。晋侯が立ちどころに起こり、幸いも盛んにはなり難い。晋侯妖しげな現象を欲しいままにするのである。だから禍災妖しげな現象を欲しいままにするのである。だから禍災私になりが秦伯(穆公)の捕虜となったことは、そうした夢にならぶものである。

#### 語注

公」(『韓詩外伝』 倶用由精神、 中、若有所畏懼、 繋がるとする点については、『論衡』にも「独臥空室之 や憂慮といった人間の精神的弱さが鬼の夢を見ることに ○其見之夢寐者、 ○纇瑕……「纇」は、きず。「纇、疵也。」(『経典釈文』) )福祉難祁也…… 畏懼、 | 巻三) 則由己之志慮疑猜、 則夢見夫人拠案其身矣。夫覚見臥聞 福祉」 存想、 ○晋侯受縶於秦伯……晋の恵公 は、 同一実也」(訂鬼)とある。 幸福。 神気惛乱……怯懦 「海内福祉帰乎王

> 体、 に死を賜った。○晋之妖夢是践……この一妖夢」は、魯 戌、晋侯及秦伯戦于韓、 も見えて言葉も聞こえる型だとする。「若夫申生、 くつかの型があることを述べ、申生の亡霊については姿 鬼篇は、 離反した晋恵公を攻めてこれを捕虜とし、「妖夢を践む 援助を受けて即位し晋恵公となる)。その後、秦穆公は せると告げた(その後、晋献公が卒すると、 ある夷吾の非礼を批判し、晋を敗戦や内乱の災難にあわ を落とした)の亡霊に遭遇したことを言う。申生は弟で の僖公十年に晋の狐突が太子申生(驪姫の策略により命 自衛するが、その後庶民に貶され麟徳元年(六六四年) り、その後は房州刺史に貶される。刺客を恐れ女装して なるが、武則天が皇后になると太子を廃されて梁王とな 正本。六四三~六六四)。 ○燕王貶徙於房州……燕王は唐の高宗の長男李忠(字は (狐突の見た妖夢の通りにした)」と言った。『論衡』訂 成其言者也。」 鬼は妖気が人の形を取ったものであることやい 獲晋侯。」(『左伝』 僖公十五年) 陳王、 雍州牧を経て皇太子と 夷吾は秦の

#### 原文] -

[注] 凡此九端、感変雖殊、占応則一、或同而異、||本文| 此謂厲妖之夢、其類可推也、

が韓の戦で秦の穆公の捕虜となったこと。「十有一月壬

同 未可 拠其往 規、 即 八潭区 吉 王符夢列篇 備

風

雨

寒暑謂之感、

五行

王相謂

之時、

陰

極 削

1 潜夫論夢列篇、 也、 思周公徳、 娠太叔、 詩曰、 有感、 因以為名、 夢帝謂己、 維熊維羆、 有時、 夜即夢之、 夢有直、 有反、 成王滅唐、 命爾子虞而与之唐、 男子之祥、此象夢也、 此精夢也、 有病、 有象、 遂以封之、 有性、 有精、 人有思即夢其 昔武王邑姜 有 及生手文 此 想、 孔子 直夢

有憂即夢其事、 此想夢也

4

也、

2 今事、 同 百病之夢、或散或集、 伏己而盬其脳、 秋冬夢熟蔵、 之夢使人飄飛、 迷、陽旱之夢使人乱離、大寒之夢使人怨悲、 陰病夢寒、 或以此吉、 貴人夢之為祥、 小人夢之為辱、 此時夢也、 陽病夢熱、 本大悪也、 此感夢也、 或以此凶、 此人夢也、 此病夢也、 賤人夢之即為殃、 晋文公于城濮之戦夢楚子 及戦、 春夢発生、 当各有察、 内病夢乱、 人之心情悪好不 乃大勝、 陰雨之夢使人厭 外病夢発 当占所従 夏夢髙明 君子夢之 此反夢

3 故先有所夢、 此性夢也 凝念注神謂之精、 善悪不信謂之想、 後無差忒謂之直、 昼有所思、 貴賤賢愚、 夜夢其事、 比擬相肖謂之象 男女長少謂之 乍凶乍

> 憂懼 略也、 夢吉事而己意大喜楽、 病 吉 陰陽之務相反故耶、 心情好悪於事有験謂之性、 極 則真凶矣、 而決吉凶者、多失其類、 訓 謂之反、 所謂春夏夢生長、 則真吉矣、 観其所 此亦謂其不慎者耳 疾 此十者、 豈覚為陽 夢凶事而 察其所夢 秋冬夢死傷 占夢之大 三意大 如使 寐為 謂

器械、 凡察夢者、 瓦器虚空、皆為欺給、 可憎可悪之事、 向衰之象、皆為計謀不従、 傾倚徴組細邪、 皆為観笑、此其大都 皆為吉喜、 新成方正、 清潔鮮好、 劓刖不安、 皆為憂患、 謀従事成 開通光明、 倡優 貌堅体健、 俳 図画 挙事不成 閉塞幽味 穢臭汚濁 儛 温 胎卵、 和升上、向興之 竹木茂美、 併小児、 刻鏤非真 妖孽怪異 解落墜下 腐爛枯槁 宮室

妄也、 夢或甚顕而無占、 不察而懵潰冒名也、 尚有不従、 必有事故焉、 今一寝之夢、 神霊所告者 況慌忽雑夢、 或基微而 或屡遷化、 小人之異夢、 乃可占耳、 故亦不専信以断事、 一有応、 亦何必乎、 百物代至、 故君子之異夢 非無也、 何也、 惟有精誠 人相対計 而其主 必有真 所夢

5

6 問善悪、 夫占夢必審其変故、審其徴候、内考情意、外考王 夢、文王不敢康吉、 国人賀夢、聞憂而喜、故能成凶、 下、虢公夢見蓐收賜之土田、自以為有吉、史嚚令 拝吉夢、修省戒慎、聞喜若憂、故能成吉以有天 禍必成、 必成、見瑞而縦恣者、 使知懼、又明於憂患与故、凡有異夢感心、 則吉凶之符可見矣、且人之見瑞而修徳者、福 見妖而戒懼者、 常恐懼修省、 祀於群神、然後占於明堂、並 以徳迎之、乃能逢吉、 福転為禍、見妖而驕侮者、 禍転為福、故太姒有吉 以滅其封、 易

⑥帰本は「亦」に作るが、ここでは芸本と『潜夫論』に

⑦帰本は「亦」に作るが、ここでは芸本と『潜夫論』に

⑧芸本は「奇」に作る。

⑩芸本は「戯弄」の上に「所」を付す。⑨芸本は「卵胎」とする。

論』(汪継培箋)に従い「乗」に改めた(HS) ⑫/ 場本と芸本ともに「栄」に作るが、ここでは⑪芸本は「唯」に作る。

『潜夫

⑬芸本は「道」に作る。

(通帰本は「非此」に改めた。
(記述など、「おは、ここでは芸本と、「潜夫論」

⑤芸本は「也」に作る。

⑪芸本は「使」の上に「外内」を付す。⑯芸本は「且」の下に「所」を付す。

\*芸本は「夢列篇」の下に「曰」を付す。

#### 校異

の字を削除した。①帰本は「夢衍発」とするが、ここでは芸本に従い「衍」

②芸本は「好悪」とする。

③芸本は「自」に作る。

⑤芸本は「不甚者爾」とする。④芸本は「乍吉乍凶」とする。

【書き下し文】

則ち一、或いは同にして異、或いは異にして同、[注] 凡そ此の九端、感変は殊なると雖も、占応あるは本文 此れをば厲妖の夢と謂う、其の類推すべきなり。

未だ其の往規に拠るべからず。 こと、王符の夢列篇に備われり(注38)。 即ち凶吉を譚ずる

1

子周公の徳を思い、夜は即ち之を夢む。此れ精夢れ熊、維れ羆、男子の祥」と。此れ象夢なり。孔 憂いあれば即ち其の事を夢む、此れ想夢なり。 想あり、 なり。人に思うことあれば即ち其の至るを夢み、 に以て之に封ず。此れ直夢なり。詩に曰く、「維 を夢む。生まるるに及び、手に文ありて虞と曰 『潜夫論』夢列篇、夢に直あり、 「爾の子に虞と命け、之に唐を与えん」と謂う 因りて以て名と為す。成王 唐を滅ぼし、遂 性あり。昔 武王の邑姜太叔を娠む。帝の己世に 人あり、感あり、時あり、反あり、 象あり、 精あり、

3

当に従う所を占うべきなり。此れ性夢なり。

悪好は同じからず、或いは此れを以て吉なり、

いは此れを以て凶なり。当に各おの察あるべ

ば乱を夢み、外病なれば発を夢む。百病の夢、

いは散じ或いは集まる、此れ病夢なり。人の心情

なれば寒を夢み、

陽病なれば熱を夢み、

内病なれ

戦うに及び乃ち大勝す。此れ反夢なり。

う。 んや。 謂う。 故に先に夢みる所ありて、後に差忒すること無き ŋ を決する者は、多く其の類を失す。豈に覚は陽為 りて、夜に其の事を夢む。乍ち凶にして乍ち吉、 し吉事を夢みて己が意大いに喜楽すれば、 と謂う。心情好悪の事に於いて験あるは之を性と 疾する所を観て、其の夢みる所を察するは之を病 男女長少は之を人と謂う。風雨寒暑は之を感と謂 善悪の信ならざる者は之を想と謂う。 念を凝らし神を注ぐは之を精と謂う。昼思う所あ は之を直と謂う。比擬相い肖るは之を象と謂う。 陽極まれば則ち凶なるは之を反と謂う。 寐は陰為りて、 五行王相は之を時と謂う。陰極まれば則ち 此の十者は、占夢の大略なり。 此れ亦た其の慎まざる者を謂うのみ。 陰陽の務め相い反する故なら 而るに吉凶 貴賤賢愚 則ち真 其の

2

に伏して其の脳を盬うを夢み、

本と大いに悪む

此れ時夢なり。晋文公 城濮の戦に楚子の己

風の夢は人をして飄飛せしむ。此れ感夢なり。春

乱離せしむ。大寒の夢は人をして怨悲せしめ、 の夢は人をして厭迷せしめ、陽旱の夢は人をして

は発生を夢み、夏は高明を夢み、

秋冬は熟蔵を夢

小人之を夢みれば辱となす。此れ人夢なり。

陰雨

れば即ち殃となし、君子之を夢みれば栄となし、 今事 貴人之を夢みれば 祥 と為し、賤人之を夢み

み、秋冬には死傷を夢みるなり。れば、則ち真に凶なり。所謂春夏には生長を夢れば、則ち真に凶なり。所謂春夏には生長を夢

4

夢或いは甚だ顕かなるも占無く、 凡そ夢を察する者は、清潔にして鮮好、 何ぞ必せんや。 は、皆な欺給となす。倡優俳舞、 信じて以て事を断ぜず。人相い対して事を計る 所は察せず、**懵**・潰・冒の名なり。故に亦た専ら なるも応ずることあるは、何ぞや。曰く、夢むる の物は、皆な観笑となす。此れ其の大都なり。 図画し、刻鏤するも真に非ず、瓦器の虚空なる むべく悪むべきの事は、皆な憂患となす。 すも従わず、事を挙ぐるも成らず。妖孽怪異、 して墜下するは、向衰の象にして、皆な計謀を為 して徴邪、劓別にして不安、閉塞して幽昧、い事成る。穢臭にして汚濁、腐爛して枯槁、 て方正、開通にして光明、 して体は健、竹木は茂美、 向興の象にして、皆な吉喜と為し、 尚お従わざるあり。況んや慌忽の雑夢、 惟だ精誠の感ずる所、 宮室器械 新たに成り 温和にして升上する 或いは甚だ微か 併せて小児戯弄 神霊の告ぐ 貌は堅に 謀談従 胎卵を 亦た 解落

6

5

る所ある者は、乃ち占う可きのみ。故に君子の

異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の要、或いは屡ば遷化し、百物代わるがわる至りて、其の主は之を究通する能わず。故に占者中らざることあり。此れ占の罪に非ず。乃ち夢者のらざることあり。此れ占の罪に非ず。乃ち夢者のらざることあり。此れ占の罪に非ず。乃ち夢者のは類を連ね博く観ること能わず。故に其の夢 験は類を連ね博く観ること能わず。故に其る夢はなり。必ず真の機あり。今一寝異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の異夢は妄に非ざるなり。必ず事の故あり。小人の

悪を問う無く、常に恐懼して修省し、徳を以て之明らかにす」と。凡そ異夢あれば心に感じて、善易に曰く、「懼れを知らしむ。又た憂患と故とをり。故に能く凶を成し、以て其の封を滅ぼせり。人をして夢を賀せしむるは、憂いを聞いて喜ぶな

# 現代語訳

を迎うれば、

乃ち能く吉に逢う。

|本文|| これを厲妖の夢という。その他の類も推測するこ

注

についての話は、王符の夢列篇に記してある。によって生じる変化)が異なっても、占応(占いとしての結果=占いとしてなんらかの結果が出るとしての結果=占いとしてなんらかの結果が出るとしての結果=占いとしてなんらかの結果が出るこれら全ての九端はすべて、感変(事物との接触

#### 語注

を参照。これまで述べてきた九端はその現れ方も内容も「感変」については本篇「感変九端、疇識其由然哉」節【1】 〇凡此九端、感変雖殊、占応則一……「九端」

注 夢」とも通ずる。「覚時所思念之而夢。」(『周礼』鄭玄 ことについて深思して見る夢。『周礼』『列子』の「思 周公徳、夜即夢之、此精夢也……意精の夢。ある特定の 衆維魚矣、実維豊年。 出。○詩曰、維熊維羆、男子之祥、此象夢也……小雅の 当時の和帝、安帝期に深刻化した社会的腐敗を憂い、官 就かず閑居執筆に専念し、『潜夫論』を著した。王符は、 異なるが、 も見える。「牧人乃夢、衆維魚矣、 斯干に見える句。 以封之……本篇「此謂厲妖之夢、其類可推也」節に前 の時弊を論じた(注3)。〇昔武王邑姜娠太叔~成王滅唐遂 僚政治や辺境管理、学問、風俗など様々な方面から社会 粛鎮原県)の人。諸学に精通したが、生涯一度も官途に 符夢列篇……王符、字は節信。安定郡臨涇県 きる点は同様であること。○往規…固定した方策。 ○想夢……記想の夢。昼間に思ったことが反映され 何らかの意味を持って占いに供することがで 同様に象徴性のある夢は小雅の無羊に 旐維旟矣、 室家溱溱。」〇孔子思 旅維旟矣。 大人占之、 (現在の甘

は四時のこと。季節ごとの特性を反映する夢。○晋文公陽の気に刺激されて見る夢。○時夢……応時の夢。「時」夢。○陰雨之夢使人厭迷~此感夢也……風雨寒暑など陰乙】○人夢……人位の夢。地位や立場に応じてみる

る夢。

0) 勝 城 態度に言及する語。 的要因 身体に影響を与える内的要因 を感じる夢を見ること。「陽病夢熱」はその反対。 陰気が盛んとなり身体を温める機能が低下するため寒さ 陰陽のバランスを崩すことで見る夢。「陰病夢寒」は、 が標準を超えたり(実証)か下回ったりして(虚証)、 之夢、或散或集、 ること 而恐懼、 濮之戦、 ・憂・思の七情)による病。 「気盛」や『素問』脈要精微論の ○陰病夢寒、 此反夢也……極反の夢。 (風・寒・暑・湿・燥・火の六淫) による病。 性情の夢。 夢楚子伏己而盬其脳、 陽病夢熱、 夢の内容というよりも、 内病夢乱、 晋文公の夢は宗空篇 (喜・怒・哀・悲・ 本大悪也、 外病夢発、 及戦 乃大 百病

常思也。」 【3】 ○差忒……くい違うこと。「忒」は違うこと、 ○比擬相肖……「比擬」「相肖」ともに比較して似てい わること。「忒、 も同様。 ○凝念注神…… 陽気盛則夢大火而燔焫」も同様。「内病」は、 (『説文』段玉裁注) ○昼有所思、 変也。」(『詩』瞻卬「鞫人忮忒」毛伝 此病夢也……体内の陰気もしくは陽気 各々の心情により夢の吉凶を推測す 精神を集中して思うこと。「念、 夜夢其事…… 『論衡』 「外病」は気候などの外 「陰気盛則夢渉大水 0) 「精念存想 夢に対する 『列子』に 恐. 本篇 変

> 気、 取らない者)による詭弁の一種であったと考えられる。 していた」者(もしくは「占夢の大略」に慎重な態度を とする考え方。王符からすれば、これは占夢の「類を失 に占うという行為自体が、陰と陽との背反を招くためだ 夢が「大略」通りにいかないのは、睡眠時の夢を覚醒時 分される。「臥夢為陰候、覚為陽占。」(『論衡』紀 人の行動は、陽に属する覚醒時と陰に属する睡眠時に二 点。「此其大略也。」(『孟子』滕文公上)「略、 に前出。「弁陰陽之気。」(『周礼』春官・占夢)「陰陽之 五行間の相性を「王・相・死・囚・老」 いわゆる王相 (趙岐注) ○豈覚為陽、寐為陰、陰陽之務相反故耶 「昼想夜夢」 (周穆王) 休王前後。」(鄭玄注)○占夢之大略也……占夢の要 (休王) とある。 説。 五行相生・相剋説に基づき 〇 五 行王相……陰陽家の で示す。 要也。

……一方に傾き歪んださま。「徴」は「微 るもの いった状況の向上。 ないこと。○温和升上……気候が温和なことと、 械 鄭玄注) 腐 「方正」は建築や器具の仕上がりに歪みが 乱 物、 ○穢臭汚濁、 枯れ た植物など(注窓)。 腐爛枯槁……汚臭の (違)」(注39)、 傾倚徵邪 昇進と

武具。

「器械、

礼楽之器及兵甲也。」(『礼記』大伝

「異器

新成方正……「器械」は礼器と

康であること。○器械、

【4】 ○貌堅体健……落ち着いて堅実なさま、身体が健

は、 天。」(『淮南子』泰族)○君子之異夢、非妄也、 な心が感じうることで見る夢。「精誠」は真心、 都……概略、 子』立政九敗解、「今俳優、侏儒」(『荀子』正論) 低い人間、芸人)」とほぼ同義と取る。「優倡侏儒」 化芝居で観客を楽しませる芸人。○小児……直前の ……あざむくこと。○倡優俳儛……歌や雑技や踊り 論校正』)○刻鏤非真……まがいものの彫刻。 まだ生まれていないものや、孵化していない卵などを描 く不安定なさま。上の「新成方正」に対応する。 流すること。 【5】 ○所夢不察而**嘈**潰冒名也……「**懵**」は、愚かであ 優俳儛」と文意が連続するものと考え、「侏儒 くこと。「卵胎、物之未成者、 云不安貌、 困于赤紱。」(『易』 困)「荀王粛本、 精誠相射。」(『潜夫論』交際)、「精誠感于内、形気動干 邪」は「斜」に通ず。 夢者にとって通常と異なるように感じる夢。君子に 小人之異夢、非栄也、 無知。「潰」は乱れる。「潰冒」は、散乱して逆 陸同。」(『経典釈文』)○図画胎卵……胎生で ○惟有精誠所感……ここでは己の純粋誠実 あらまし。「且命工人存其大都焉。」(韓愈 ○劓刖不安……「劓刖」 故為「見欺紿」。」(『潜夫 必有真機焉…… 劓刖作臲 (背丈の [梟兀]、 必有事 「劓刖 ○欺紿 誠意。 は危う 〇大 渞

類博観……類似するものを繋げながら、広く観察するこ類博観……類似するものを繋げながら、広く観察するとのであること。また小人にとっての異夢は、〔愚昧な者のであること。また小人にとっての異夢は、〔愚昧な者のであること。また小人にとっての異夢は、〔愚昧な者のであること。「真機」は玄妙の理。まことのきざし。○連関わるものではなく、何かしらの意味があって見るものであること。「真機」は玄妙の理ながら、広く観察すること。「真機」は玄妙の理ながら、広く観察すること。

收。」『左伝』昭公二十九年)○史嚚令国人賀夢、 白・金・刑などを象徴する。「蓐收、 ……號は周文王の弟である號仲が封ぜられた地 公に「晋を汝の国に入らせよう」と告げた夢は、 也。」(『国語』晋語二「如君之言、 に滅ぼされる。蓐收は刑罰を司る神の名。 平王の東遷によって国を移し南號となる。春秋時代、晋 吉事篇に前出。○虢公夢見蓐收賜之土田、 生えた梓を植え替えると松柏に変化した夢。 の朝廷に荊棘が生え、また太子発 【6】 ○太姒有吉夢……『逸周書』 「孟秋之月……其神蓐收。」(『礼記』月令)、「金正曰蓐 (晋に滅ぼされることの予兆) であったが、虢公は吉 故能成凶、 以滅其封……史嚚は虢の太史。蓐收が (武王) 程寤篇に見える。 則蓐收也」 西方白虎金正之官 が周の朝廷に 自以為有吉 西方・秋・ 『夢占逸旨 (西號)。 聞憂 本来凶

で、まずは道義に基づく行いを通じて夢に向かい合うことが重要であることを述べる。

「智が重国に投降する)と思いこみ、国民にその夢を夢(晋が自国に投降する)と思いこみ、国民にその夢を夢(晋が自国に投降する)と思いこみ、国民にその夢を夢(晋が自国に投降する)と思いこみ、国民にその夢をあった文王と、「自ら以て吉ありと為」した虢公との対かった文王と、「自ら以て吉ありと為」した虢公との対かった文王と、「自ら以て吉ありと為」した虢公との対かった文王と、「自ら以て吉ありと為」した虢公との対かった文王と、「自ら以て吉ありと為」した虢公との対が、および『易』の言葉を受け、異夢の吉凶を容易に確にせず、まずは道義に基づく行いを通じて夢に向かい合信せず、まずは道義に基づく行いを通じて夢に向かい合信せず、まずは道義に基づく行いを通じて夢に向かい合信せず、まずは道義に基づく行いを通じて夢に向かい合信せず、まずは道義に基づく行いを通じて夢に向かい合

を校本として参照した。

#### 訳者注

単にまとめておく。 単にまとめておく。

的に整っているものの、中には帰本に見られない誤記も確認のに整っている。資料の引用および書式については、芸本の方が全体との異同が多く認められる別種の版本として、陳士元『帰雲をの異同が多く認められる別種の版本として、陳士元『帰雲所収本である(本稿では「芸本」と称している)。一方、芸本所収本で、資料の引用および書式について版本は、呉省蘭輯『芸海珠塵』

考えたことから、今回の訳注作業では帰本を底本とし、芸本自撰集所収の帰本のほうが原初の形態に近い可能性が高いと関連研究において帰本を底本として扱う前例がなく、また、関連研究において帰本を底本として扱う前例がなく、また、関連研究においできるため、どちらが『夢占逸旨』の原初形態に近いかにつできるため、どちらが『夢占逸旨』の原初形態に近いかにつ

現時点で確認できていることは以下の通りである。
査途中のため未だその全貌を把握するには到っていないが、年図書館に現存することを偶然に知り実見調査を行った。調年図書館に現存することを偶然に知り実見調査を行った。調上記の基本方針のもと、二○○八年から開始した訳注作業

しており、いわゆる「自注」は「他注」であったこと。ものとされていたが、明刊本はこれを子の陳堦による注とものとされていたが、明刊本はこれを子の陳堦による注と

③明刊本には陳毅(士可、一八七三年~没年不詳)による題よく一致すること。

記が書き入れられていること。

るものであったかという点が今後の大きな問題となろう。
①については、『夢占逸旨』の構成と編著者の実態がいかな

- 0) 版本的性格を今一度考える必要がある 性格を持つ版本であったことが明らかになったため、帰本 ②については、 帰本よりもむしろ芸本のほうが明刊本に近
- ため、 資料となろう。 わりからなされた夢に対する再評価の実態を知る上で貴重な 清朝から民国への移行期に、 決之疑問。此書徵攬宏博、 術雖近迷信、 の特性について、当時の心理学を念頭に置きながら、「占夢ラ および該書が台湾への流出した経緯など興味深い問題も多い ③については、 引き続き調査を続けていく。また、 然神意之間何以生此幻象、亦講心理学者至難解 陳毅が明刊本『夢占逸旨』を入手した経路 信可供研究之資」と言及する点は 西洋科学とりわけ心理学との関 陳毅が『夢占逸旨

第四十三 淫邪発夢篇

確認・修正作業を進めてゆく所存である。 成果を取り入れつつ、これまでの方針を見直し、 での訳注における不備をお詫びするとともに、今後は調査の たに考察すべき問題がいくつも生じることとなった。これま 以上、 明刊本 『夢占逸旨』の発見と実見調査によって、 再度内容の 新

- (3) 「黄帝日、 (2)「不識感変之所起者、事至則惑其所由然。識感変之所起者 事至則知其所由然。 皆通於天地、 願聞淫邪泮衍奈何。岐伯曰、正邪従外襲内、 応於物類。」(『列子』 周穆王) 知其所由然、 則無所怛。 一体之盈虚消息 而未
- 有定舍、反淫于蔵、不得定処、与営衛俱行、 而与魂魄飛揚

- 甚飽則夢予。 陰陽倶盛則夢相殺。上盛則夢飛、下盛則夢堕。甚飢則夢取 岐伯曰、陰気盛、則夢渉大水而恐懼。 脊両解不属。凡此十二盛者、至而写之立已。」(『黄帝内経霊枢 盛則夢善笑恐畏。脾気盛則夢歌楽身体重不挙。腎気盛則夢腰 淫于蔵、 使人臥不得安而喜夢。 則有余于内、不足于外。黄帝曰、有余不足有形乎。 肝気盛則夢怒。 気淫于府、 肺気盛則夢恐懼哭泣飛揚。心気 則有余于外、不足於内。気 陽気盛、則夢大火而燔炳
- (5)「一体之盈虚消息、皆通於天地、応於物類。 4)「是知陰盛則夢渉大水恐懼。陽盛則夢大火燔灼。陰陽倶盛則 不語、 夢火、将疾夢食。飲酒者憂、 実為疾者、 多則夢相擊毀傷。」(『黄帝内経素問』第十六 脈要精微論 夢相殺毀傷。 甚飽則夢与、 大水而恐懼。 夢取。肝気盛則夢怒。 形接為事。故昼想夜夢、 信夢不達。 則夢溺。 甚飢則夢取。是以以浮虚為疾者、 陽気壮、則夢渉大火而燔焫。陰陽倶壮、則夢生殺 上盛則夢飛、 物化之往来者也。 藉带而寝則夢蛇、 肺気盛則夢哭。短虫多則夢聚衆、 神形所遇。故神凝者想夢自消。 下盛則夢堕。 歌舞者哭。子列子曰、 古之真人、 飛鳥銜髮則夢飛。 甚飽則夢予、 陰気壮、 其覚自忘、 則夢揚。 神遇為夢、 甚飢 則夢鴻 将陰 以沈 其
- る気とし、さらにそれらから生じる喜怒悲憂恐を五志とする 『類経』張景岳注では、五気を五蔵 (心肺肝脾腎) から生じ

6

寝不夢。

幾虚語哉。」(『列子』周穆王

- (巻二)。
- (7) 元魏の瞿曇般若流支訳の『正法念処経』に「若虫歓喜有力、(7) 元魏の瞿曇般若流支訳の『正法念処品』に「若虫歓喜有力、夢見諸夢、或善不善、以虫過故、以虫流行於心脈故、夢見衆相」音生・天上に関する事象である。「身念処品」は人体の生理現畜生・天上に関する事象である。「身念処品」は人体の生理現る。「正法念処経』に「若虫歓喜有力、

に宿り人に夢を見させる虫とされている。

- (8)「是以少気之厥、令人妄夢、其極至迷。三陽絶、三陰微、是以肺気虚則使人夢見白物、見人斬血藉藉。得其時則夢見與。肝気虚則夢見菌香生草、得其時則夢伏樹下不敢起。心気虚則夢教火陽物、得其時則夢燔灼。脾気虚則夢伏樹下不敢起。心気虚則夢築垣蓋屋。此皆五蔵気虚、陽気有余、陰気不足、心気虚則夢築垣蓋屋。此皆五蔵気虚、陽気有余、陰気不足、心気虚則夢禁垣蓋屋。此皆五蔵気虚、陽気有余、陰気不足、心気虚則夢禁垣蓋屋。此皆五蔵気虚、陽氣不見之。三陽絶、三陰微、是
- (9)「少気之厥、令人妄夢、其極至迷。三陽絶、三陰微、是為少(9)「少気之厥、令人妄夢、其極至迷。三陽絶、三陰微、是為少(2)以(注8参照)の「少気之厥」は、体内の気が不足し、陰陽下利清穀、裏寒外熱、手足厥逆、脈微欲絶。」この「少陰 引に下利清穀、裏寒外熱、手足厥逆、脈微欲絶。」この「少陰 引に下利清穀、裏寒外熱、手足厥逆、脈微欲絶。」について、金載斗訳注『夢占逸旨号천号引』(全部4十字、二〇〇〇ついて、金載斗訳注『夢占逸旨号천号』(全部4十字、二〇〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「中国、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「一〇回、4年)、「中国、4年)、日本、4年)、中国、4年)

経の経気が四肢に到達しえないことを言い、『夢占逸旨』のい帝内経素問』脈解)を引くが、これは色欲過度による少陰腎八年十一月)は、腎虚の説明としての「少陰不至者、厥也」(『黄

う「気虚」「邪寓」の夢と相容れない。

- (11)「厥気客于心、則夢見丘山烟火。客于肺、 邑衝衢。 至而補之立已也。」(『黄帝内経霊枢』第四十三 淫邪発夢篇)、「是 于股肱、則夢礼節拝起。客于胞腫、則夢溲便。凡此十五不足者 則夢斬首。客于脛、 客于胃、 之奇物。 以少気之厥、令人妄夢、其極至迷。」(『黄帝内経素問』第八十 屋風雨。 客于肝、 客于胆、則夢闘訟自刳。客于陰器、則夢接内。 則夢飲食。客于大腸、 客于腎、則夢臨淵没居水中。客于膀胱、 則夢山林樹木。客于脾、 則夢行走而不能前、及居深地窮苑中。 則夢田野。客于小腸、 則夢見丘陵大沢壊 則夢飛揚、 則夢遊行 客于項 見金鉄 則夢聚
- (12) (注5) を参照

方盛衰論

- (13) (注5) を参照
- (4)「或曰、人亦有直夢。夢見甲、明日則見甲矣。夢見君、明日紀以上、所夢見甲、夢見君、明日見甲与君。此直也。如問甲与君、則見君矣。曰、然。人有直夢直夢皆象也。其象直耳。何以明之。(4)「或曰、人亦有直夢。夢見甲、明日則見甲矣。夢見君、明日(5)
- (15)「鄭人有薪於野者、遇駭鹿、御而撃之、斃之。恐人見之也。

以為夢焉。 遽 所不能弁也。欲弁覚夢、唯黄帝孔丘。」(『列子』周穆王) 又謂夢認人鹿無人得鹿。今拠有此鹿請二分之以聞鄭君。鄭君曰 妄謂之夢、真夢得鹿妄謂之実。彼真取若鹿而与若争鹿、 所夢而尋得之。遂訟而争之、帰之士師。士師曰、若初真得鹿 者之帰不厭失鹿。其夜真夢蔵之之処。又夢得之之主。爽旦案 得鹿是若之夢真邪。夫曰、吾拠得鹿、 者矣。室人曰、 告其室人曰、 而蔵諸隍中、 士師将復夢分人鹿乎。訪之国相。 順塗而詠其事。傍人有聞者、 向薪者夢得鹿而不知其処。吾今得之。彼直真夢 若将是夢見薪者之得鹿邪。詎有薪者邪。 覆之以蕉、 不勝其喜。俄而遺其所蔵之処。 国相曰、夢与不夢、 何用知彼夢我夢邪。薪 用其言而取之。既帰 室人 今真 遂 臣

以観後世已痛悼也。

秋駕御法也。」(『呂氏春秋』博志

- 而不謝、直云待後貴当相酬耳。」(『晋書』劉殷伝)是食之、七載方尽。時人嘉其至性通感、競以穀帛遺之。殷受是食之、七載方尽。時人嘉其至性通感、競以穀帛遺之。殷受害而掘之、得粟十五鍾、銘曰七年粟百石、以賜孝子劉殷。自
- 人害己、既寤、聞榻上宝剣鎗然有声、躍起、抽剣曰、将有変邪。年、末帝徳妃薨、将葬、友孜使刺客夜入寝中。末帝方寐、夢18)「梁康王友孜、目重瞳子、嘗竊自負、以為当為天子。貞明元

- 所夢固秋駕。已上二士者可謂能学矣。可謂無害之矣。此其所以秋駕。尹儒反走北面再拝曰、今昔臣夢受之先為其師言所夢。以秋駕。尹儒反走北面再拝曰、今昔臣夢受之先為其師言所夢。明日往9)「尹儒学御三年而不得焉。苦痛之夜夢受秋駕於其師。明日往
- 吾以観其復也。」 一章以觀其復也。」 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕于師。明日往朝、師望之、谓之曰、吾非愛道于子也、 一章秋駕,常寝想之。中夜、夢
- (21)「殷浩、字深源、陳郡長平人也。父羨、 財本是糞土、 好老易。 者自沈、 もほぼ同様の内容が見える。「人有問殷中軍、 者所宗。 於光禄勲。 都下人士因其致書者百余函、 棺器、将得財而夢矢穢。殷曰、官本是臭腐、所以将得而夢棺屍 人以為名言。」(『晋書』 官本臭腐、 浮者自浮、殷洪喬不為致書郵。 或問浩曰、将莅官而夢棺、 融与浩口談則辞屈、 故将得官而夢尸。銭本糞土、 浩識度清遠、 所以将得而夢穢汙。時人以為名通。」 殷浩伝)また、『世説新語』 弱冠有美名。尤善玄言。与叔父融俱 行次石頭、 著篇則融勝、 将得財而夢糞、 故将得銭而夢穢。時 字洪喬、 其資性介立如此。 皆投之水中、 浩由是為風流談論 何以将得位而夢 為豫章太守。 何也。浩日 文学篇に Ę 沈 紁

- (二柱)とある。(二柱)とある。
- (3) 夢が自身(遵誨)ではなく他者の貴顕を暗示する場合もある。 (3) 夢が自身(遵誨)ではなく他者の貴顕を暗示する場合もある。 選詢嘗謂太祖曰、毎見城上紫雲如蓋、又夢登高台、遇黒蛇約長百尺余、俄化龍飛騰東北去、雷電隨之、是何祥也。太蛇約長百尺余、俄化龍飛騰東北去、雷電隨之、是何祥也。太祖皆不対。」(『宋史』董遵誨伝)
- 知其夢也。」(『莊子』 斉物論) (24) 「夢飲酒者、旦而哭泣。夢哭泣者、旦而田獵。方其夢也、不
- (25) (注5) を参照。
- (26) (注5) を参照。
- るが、『夢占逸旨』にある「仏書」については詳細不明。(2)。『維摩経義疏』仏道品第八に「如餓夫夢飯。無有飽斯」とあ

公十年

- 28)「飢人忽夢飯甑溢、夢中一飽百憂失。」(蘇軾「次韻孔毅父久
- 於神明。匹夫匹婦強死、其魂魄猶能馮依於人、以為淫厲。」(『左(30) 「趙景子問焉、曰、伯有猶能為鬼乎。子産曰、能。人生始化庭堅「謫居黔南十首」)

昭公七年

庶人、囚黔州承乾故宅。」(『新唐書』巻八十一)

- 孔六帖』巻九十 報恩六)〔 〕内は、孔伝の続撰部分。(31)「当休明之代〔物不為妖〕、而聚怨之人〔鬼将有報〕。」(『白
- (33)「房州刺史 梁王忠、 聊生、 常自占卜。」(『旧唐書』巻八十六)、「俄徙房州刺史。忠寖懼不 六、高宗顕慶五年 (六六〇)) ただし、「数有妖夢」の一句は『資 大、常恐不自安、或私衣婦人之服、以備刺客。又数有妖夢! 治通鑑』ではなく『旧唐書』『新唐書』に見える。 「忠 年漸長 徙黔州、囚於承乾故宅。(司馬光『資治通鑑』巻二百、 刺客。又数自占吉凶。或告其事、秋、七月、乙巳、廃忠為庶人、 至衣婦人衣、 備刺客。 年浸長、 数有妖夢、 頗不自安、 嘗自占。 或私衣婦人服以備 事露、

- 、34)汪継培箋・彭鐸校正『潜夫論箋校正』(中華書局、一九八五 張覚『潜夫論全訳』(貴州人民出版社、一九九九年)によると、 年)は「諸臭汚腐爛、枯槁絶霧、傾倚徴邪」とする。 彭鐸氏や
- 一徴」は「微」の誤りで、「違」「衰微」の意と通ずる。
- (3)張覚氏は、『夢占逸旨』と汪継培箋について「義未安」とし、 「乖」の可能性を提示する。
- (36)『潜夫論』のテキストについては、『潜夫論箋校正』(前出 しつつ、必要に応じて校異もしくは注釈を付す。 の間にもかなりの異同が認められるが、本稿では帰本を尊重 ○年)が校訂を行っている。『夢占逸旨』所収の『潜夫論』と 劉文英『梦的迷信与梦的探索』(中国社会科学出版社、二〇〇 の他、張覚『潜夫論全訳』(貴州人民出版社、一九九九年)や、
- (37)『後漢書』王符伝、張覚『潜夫論全訳』前言「一、王符的生 平事迹及其所処的时代\_
- 38) 張覚氏校訂本には「穢臭汚濁腐爛、 は さまとし、上の「貌堅体健」と対になるとする。 「枯槁」を人間のやせ衰えたさま、「絶霧」を強健ではない 枯槁絶霧」とある。氏
- 箋校正』)とし、『広雅』「微、違、離也」を引く。 彭鐸は「「徴」蓋「微」字之誤。微、読為「違」」(『潜夫論
- (41)「易之為書也、不可遠、為道也屡遷。変動不居、 逸旨》引文作《大都》、也通」(張覚氏注 現行本『潜夫論』は「大部」とする。「大部:大体。《夢占 周流六虚

外内使知懼。又明於憂患与故、無有師保、 如臨父母。」(繋辞

伝下)

上下無常、

剛柔相易、

不可為典要、

唯変所適。

其出入以度